公現後第１主日礼拝説教 「水の中から」 予稿

日本基督教団石神井教会　2026 年 1 月 11 日

【旧約聖書日課】出エジプト記　14章15～22節

15主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの
人々に命じて出発させなさい。16杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、
海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通る
ことができる。17しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼ら
はお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と
騎兵を破って栄光を現す。18わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を
現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」19イスラ
エルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを行き、彼
らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、20エジプトの陣とイスラエルの陣
との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、
互いに近づくことはなかった。21モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は
夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、
水は分かれた。22イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼ら
の右と左に壁のようになった。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一　5章6～9節

6この方は、水と血を通って来られた方、イエス・キリストです。水だけでは
なく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方
です。“霊”は真理だからです。7証しするのは三者で、8“霊”と水と血です。この三
者は一致しています。9わたしたちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証
しは更にまさっています。神が御子についてなさった証し、これが神の証しだか
らです。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗
礼を受けられた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自
分に降って来るのを、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛する子、
わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

「あなたはわたしの愛する子」【こども説教のために】

教会は、「公現日」（１月６日）を経て、クリスマスの装いがすっかり片づけられました。ベツレヘムの町で人知れずお生まれになられ、父母の他には、天使らや羊飼いたち、そして東方の占星術の学者らなど、限られた人にしかその誕生が祝われることのなかった神の御子イエスのことを、クリスマスの装いをしなくても知ることができるときを迎えたのです。主イエスの「洗礼」のときです。

幼子であった主イエスは、成人されていました。そのころのユダヤ人は、12～13 歳で大人扱いが始まったとされますが、一人前と見られるようになるのは 30 歳前後になってからでした。主イエスが「洗礼」をお受けになられたのは、およそ 30 歳のころだったと言います。

それまでは、両親の家で育ち、大工であった父ヨセフの仕事を手伝い、覚え、大工として働くこともしていたのかもしれません。もちろん、両親の家のあったナザレの村では、「ヨセフとマリアの子」として知られていたでしょう。弟たち妹たちが大勢いましたから、彼ら兄弟の長男坊としても知られていたかもしれません。幼いときからのことを知っている村の人々からは、親しみを込めて、大人になっても「イエスちゃん」などと呼ばれていたのではないでしょうか。

その「イエスちゃん」が、ある日、村を出て行ったのです。どうやら、有名な人のもとへ向かったようです。ヨルダン川で人々に「悔い改めよ」と呼びかけて「洗礼」を授けていた、「洗礼者ヨハネ」のところに行かれたのです。**ヨハネから洗礼を受け**るためでした。

その日から、主イエスは、「ヨセフとマリアの子」として知られるのではなく、「神の子」として知られる歩みを始められました。洗礼を受けられたとき、天から響く声を聴かれたからです、「**あなたはわたしの愛する子**」と。幼いときから知る家族や村の人だけでなく、「神に愛されている子」として人々に知られるような歩みが、そのときから始められたのです。「洗礼」は、主イエスが「神の子」として新しく生まれ直されるようなこととなったのです。

主イエスに従うようになった弟子たちの教会は、主イエスの「洗礼」にならって、「洗礼」を授けるようになりました。教会は、主イエスのように「洗礼」を受けて、「神に愛されている子」として人々に知られるような歩みを始める者たちの集まりとなりました。人として生まれたときの家族にとどまらずに、「神の家族」の一人として数えられ、覚えられる「神の子」となって、互いのことを知るようになるのです。

導かれてきたすべての人が、いつか「洗礼」を受け、「神の子らの家族」として憶え合う日が来るために、主イエスがまず「洗礼」を受けられました。

「水」から「血」へ

「週報」には、教会暦として「公現後第１主日」の呼称が記されています。「公現日」後から「受難節」に入るまでの期節を「公現後」と称しています。日本基督教団では、2019 年から提案され、用いられてきました。

「公現後」の期節から「受難節」を経て「復活祭」に至る期節に、教会は、主イエスの公生涯のおもな出来事を辿りつつ、歩みを重ねます。日曜日の営みだけで公生涯のすべてを網羅できるわけではありませんが、教会が大切にしてきた出来事を確かめつつ、主イエスの歩まれた道を辿って行くのです。それをひと言でいうならば、「水から血へ」と言うことができるかもしれません。「洗礼の水」から始まって、「十字架の血」に至られた、主イエスのご生涯の道行きです。

「マルコによる福音書」は、その主イエスのご生涯を、冒頭で「**神の子イエス・キリストの福音の初め**」（1:1）と記すように、「神の子」の生涯として綴っています。そこに、他の福音書が記すような誕生の物語は含まれません。ただ、主イエスがガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた、ということから物語は始まります。主イエスが「神の子」であると宣言された「**あなたはわたしの愛する子**」という天からの声を添えて、始められるのです。

わたしたちは、この同じ響きを、この福音書のほとんど終わり、主イエスが十字架につけられて血を流され、息を引き取られた場面でも聞くことになるでしょう。ただし、そこでは、天からの声ではありません。地上に立って十字架につけられた者を見張る兵士、百人隊長の呟く声として聴くのです、「**本当に、この人は神の子だった**」（15:39）という言葉を。

ご降誕の美しい物語が語られなくても、主イエスのご生涯は、「神の子」の生涯に他なりません。その幼少期のこと、青年時代のことに、わたしたちは、関心を持ちます。他の福音書が伝えてくれていることから、想像を膨らませて、主イエスの人物像を探ったりいたします。けれども、わたしたちがこれからしばらく耳を傾けて行こうとしている「マルコ福音書」は、そのようなことを探ろうとはいたしません。以前のことは問わないのです。ただ、主イエスが「洗礼」をお受けになられたときからのことだけに、わたしたちの目を向けさせるのです。

わたしたちも、「洗礼」から始まりました。どのように「洗礼」に至ったかということも大切ですが、もっと大切なことは、「洗礼」から始まったということです。「洗礼」の水の中から上がったときから、始められたのです。神の聖霊がわたしにお働きくださることを繰り返し確かめる歩みが始まり、「あなたは神の子」と繰り返し告げられながら歩む歩みが始められたのです。

「霊」が降って

主イエスの「洗礼」から始められた公生涯の道を辿りながら、わたしたちは、自分自身の「洗礼」を思い巡らすことになるでしょう。すでに「洗礼」を受けている者は、その自分の「洗礼」を思い起こし、そこから始められた「神の子」として知られるように重ねられてきた歩みを思い巡らします。まだ「洗礼」を受けていない者は、いずか受けるかもしれない自分の「洗礼」を想像し、そこに至る道が自分には開かれているのかと問い、そこから始まる「神の子」として知られるようになる自分の人生を想像し、思い巡らしてみるのかもしれません。

主イエスの公生涯を辿る期節の終わり、「復活祭」には、またそれに続く「聖霊降臨祭」には、多くの教会で新たに「洗礼」にあずかる方が与えられることでしょう。わたしたちも、この群れの中で新たに「洗礼」にあずかられる方が現れることを願わないではいられません。

大切なことは、わたしたちが、この「洗礼」という事柄を、何かわたしたちの伝道活動の成果であるとか、本人の信仰的鍛錬の結果であるとかと、勘違いしないことです。それはすべて、神がお働きくださる恵みの果実に他ならないのですから。

主イエスは、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられました。洗礼者ヨハネは、人々に「悔い改めよ」と呼びかけ、悔い改めのしるしとして洗礼を授けていました。人々の悔い改めを問うたのです。どれだけ真摯に悔い改めているかを問いました。もちろん、ヨハネに人の悔い改めの真偽を見定める能力があったわけではないのでしょう。けれども、彼は、人々に悔い改めるように迫り、その真摯なることを問い、それに応えた者に洗礼を授けました。

そのヨハネから洗礼をお受けになられた主イエスは、どのような悔い改めをなさったのでしょうか。福音書は、そのことには何も触れません。何も語らずに、ただ、主イエスが洗礼をお受けになられたという事実から、すべてを始めるのです。そして、その初めに起こったこと、主イエスがご覧になられたこと、**水の中から上がるとすぐ、天が裂けて例が鳩のように御自分に降って来るのを、ご覧になった**ということを、わたしたちに示しています。

それが、わたしたちの「洗礼」でまず見るべきことなのです。

「洗礼」は、ゴールではなく、始まりです。「洗礼」から始まります。「洗礼の水」の中から上がったときから、始まるのです。自分に留まる聖霊に目を向け、神がお働きくださることに目を向ける人生が始まり、「神の子」と呼ばれる者として歩む人生が始まるのです。神から受けるもの、恵みによって自分の人生を方向づけ、自分の「十字架」の日を目指して生きる歩みが、始まるのです。